

平成 24 年度 狩猟鳥獣のモニタリングのあり方検討会
議事概要

日時：平成 25 年 3 月 12 日（火）10:00-12:00

場所：航空会館 801 会議室

1. 狩猟鳥獣の情報収集のあり方等について

○ 追加的モニタリングの必要性について（哺乳類）

- ・ 追加的モニタリングとは、分布だけでなく密度指標なども調査することを前提としているのか。（羽澄）
→ まずは狩猟鳥獣としての魅力等についてのアンケート調査を行い既存資料の動向をどうとらえるべきか検討することを考えている。（環境省）
→ それに加えて、センサーカメラなどを利用した密度調査なども別途必要になるかもしれない。（羽澄）
- ・ 外来生物については追加的モニタリングの対象外としているが、外来生物の方の視点からはモニタリングの必要性や有用性が高いのではないか。（羽澄）
→ 外来生物は、外来法に基づく防除計画によってモニタリングを行っている。この業務としては、本来狩猟資源である種を優先的にモニタリングを行うという棲み分けを考えている。（黒崎）
→ それぞれの法律に基づいた情報を整理して、効率よく一本化していく方向性を考えた方が良いのではないか。それに加え、今後、狩猟者の減少により既存の調査方法（狩猟者へのアンケートなど）が活用できなくなる可能性も想定し、鳥獣相や全体の分布などを把握する大規模な調査の実施を検討すべき。（羽澄）
- ・ 基本的には事務局案で良いと思うが、ノウサギについてどのような狩猟実態があるのか、被害対応としての有害捕獲数がどのようにになっているのかを確認した方が良い。（三浦）
- ・ 今回は追加的モニタリングを実施する優先度を示しているが、どの種についても継続的なモニタリングが必要であることを、考え方として確認したい。（橘）
→ ご指摘のとおり、モニタリングは全ての狩猟鳥獣について必要。今回は狩猟鳥獣の中でも、そのモニタリングを追加的にやる場合の優先順位を議論していただきたい（黒崎）
- ・ 資源性や害性は、人間の文化や社会変化で変わってくるということを意識しておくべき。（橘）

○ 追加的モニタリングの必要性について（鳥類）

- ・ 情報が少ない種で、追加的モニタリングが必要という認識でよろしいか。（橘）
→ 哺乳類での考え方と同様で、情報量と害性、資源性を合わせて評価している。（黒崎）
- ・ ミヤマガラスは情報量が少ないのに優先度が低いのはなぜか。（羽澄）
→ ミヤマガラスは資源性があまり高くなく、害性が強いので優先度を低くした。（黒崎）

- ・ ウズラについては優先度が高いとなっているが、今後狩猟鳥獣から除外された場合、モニタリングは実施されなくなるのか。(川路)
→ウズラは狩猟資源として人気が高く、モニタリング手法の調査・検討を続けている種。手法を確立させ、可能な限りモニタリングを継続したいと考えている。狩猟鳥獣から外れた場合の対応は今後検討する。(安齊、環境省)
- ・ 鳥類に関しても、資源性や害性は変化するため、モニタリングの優先度は現時点の判断であることを認識しておく必要がある。(橘)

2. モニタリング手法の確立していない種のモニタリング手法について

○モニタリング手法の検討状況とアンケート調査等の結果について

➤ ウズラ

- ・ プレイバック調査について、音声に強く反応した事例は、本来の縄張りに近い位置で音声を再生したためという可能性もある。(尾崎)
- ・ 野鳥の会による月別の確認羽数では、2010年以降で減少。もしかしたら有意差があるかもしれない。(尾崎)
→確認羽数の減少については、もう少し長期的なデータから評価した方が良いと考えている。(安齊)
- ・ 最終的に各自治体で調査するとなった際に、調査手法が猟犬を使った調査だけで他に何もないと、果たして各自治体が実際に実施できるか疑問。(川路)

➤ ヤマドリ

- ・ 出合数調査は、調査の精度を保つために特定の場所に限定して実施した方が良いかもしれない。(川路)

➤ ヤマシギ

- ・ 繁殖期には、夕方森林内で飛び回るが、その時間には探鳥会が行われないうえに、野鳥の会の支部報では確認羽数が少ないのではないかと。(尾崎)
- ・ 自動撮影カメラでヤマシギ、キジ、ホオジロなどが良く撮影されるため、モニタリングに活用できるかもしれない。(羽澄)
- ・ イギリスでは、繁殖期の夕方に見られるディスプレイ・フライトを利用した羽数確認を行っており、全国的なデータを蓄積している。国内では地域が限定されるが、高密度に生息しており、捕獲やリキャプチャーのできる場所もある。モニタリング手法として活用できるかもしれない。(尾崎)
→海外でも色々な事例があるが、日本に合う手法を探っていきたい。(安齊)
- ・ ヤマシギについて、野鳥の会の支部報で多くの情報が提供されていることに驚いた。観察会を継続してもらうことで、動向などもある程度は把握できるのではないかと。(川路)

→情報が正確に反映されているかどうかや、調査努力量は、年代や地域によって異なる。精度は一定ではないことを認識しておく必要がある。(尾崎)

➤ 全体

- ・ 今回の生息状況のアンケート調査結果について、繁殖期と越冬期に分けて地図を作成すると、越冬分布が見て取れるのではないか。(尾崎)
- 今後、月別などでも分布地図を作成し、確認を行いたい。(安齊)

○ 今後の対応方針について

➤ 調査について

- ・ ウズラの繁殖期調査は、飛来後十分に落ち着いた時期に実施すべき。(川路)
- ・ ヤマドリの初猟日出合数調査の同行について、1ヶ所程度で実施となっているが、地域によって異なるため複数ヶ所で実施すべき。また、その際には生息数が多い場所と少ない場所をバランス良く選ぶ必要がある。(川路、羽澄)
- ・ モニタリングには定量性が必要であるため、狩猟者へのアンケート調査だけでなく、密度調査などの新しいモニタリング手法も検討すべき。(羽澄)
- ・ ウズラもヤマシギも国内外の移動実態が分かっていない。個体数動向や分布を把握するために、標識調査を上手く活用するよう呼び掛けたい。(尾崎)
- ・ DNA や同位体を利用して、博物館の標本などとの対比により地域のポピュレーション調査を行える可能性がある。学術研究になるので、興味のある方がいればやってみよう後押しすると良い。(尾崎)

➤ その他

- ・ 平成 29 年度へ向けたスケジュールがゆったりしているように感じる。(橘)
- ・ 既存のモニタリング手法の是非について評価し、不足分を補う方法などについて、もっと意見交換の機会を増やすべき。(橘)
- ・ アンケート調査の結果を協力してくれた団体にフィードバックすることで、今後の調査の組織作りにもなる。(川路、橘)
- 今回の結果は色々な形でまとめて、最終的には情報をお渡しする予定。(安齊)